

### 美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動の実態と課題

馬場, 憲一 / BABA, Kenichi / NAKAMURA, Megumi / 中村, めぐみ

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :  
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

2014-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009643>

<論 文>

## 美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動 の実態と課題

中 村 めぐみ  
馬 場 憲 一

**【抄録】** 近年、美術館においても高齢者やしょうがい者、さらに外国人などマイノリティに対する対応が大きくクローズアップされてきており、美術館におけるマイノリティを対象にしたソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）活動という視点から論じた。日本における美術館のソーシャル・インクルージョン活動は一部の美術館を除き、その取り組みは活発とはいえ、課題が多いことを指摘した。先進的な実践例を分析し、それら課題克服のためには、（１）手話サークルやしょうがい者団体など関連団体との関係づくり、（２）視覚しょうがい者、外国人、高齢者などユーザーの意見や情報収集、（３）美術館職員のソーシャル・インクルージョン活動への意識の向上などが、この活動を推進していく上で重要な条件となることを指摘した。またソーシャル・インクルージョン活動を行うにあたっては、人材の育成・確保もまた重要であり、ソーシャル・インクルージョン活動を行う上で人材不足の美術館にとってボランティアの組織化は有効な解決策の一つであることを提示した。

**【キーワード】** 美術館 博物館 ソーシャル・インクルージョン しょうがい者  
高齢者 外国人

### はじめに

2010年6月7日、後述するように文化審議会総会において「文化政策部会審議経過報告」がなされているが、その中で高齢社会、生涯学習社会を迎え博物館（美術館を含む）の管理運営方策の充実のために高齢者や身体しょうがい者、さらに外国人などにも対応したソフト施策を図っていくことが求められている<sup>1</sup>。このように、近年、博物館、美術館でのマイノリティへの対応が大きくクローズアップされてきているにも関わらず、博物館、美術館におけるマイノリティを対象とした

<sup>1</sup> 「文化政策部会審議経過報告」別添 pp16-17  
([http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/51/pdf/shiryo\\_2\\_3.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/51/pdf/shiryo_2_3.pdf) 2013年12月8日閲覧)

ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）活動という視点から論じた研究は少ない<sup>2</sup>。

そのため、本稿では海外の事例によって博物館におけるソーシャル・インクルージョンの始まりから現在に至る活動の広がり进行を明らかにし、つぎに美術館、博物館だけでなくNPOなどの市民団体によるソーシャル・インクルージョン活動、また国（文化庁）の施策を通してこれまで日本においてソーシャル・インクルージョン活動として、どのような動きがあったのかをみていくことにした。さらに美術館のソーシャル・インクルージョン活動の事例を紹介し、日本における美術館のソーシャル・インクルージョン活動の実態と課題を考察し課題克服のための施策を提示することにした。

## 1. 博物館におけるソーシャル・インクルージョン活動の始まり

1990年代以降、欧米諸国ではソーシャル・インクルージョンに関する政策が作られるようになったが、ソーシャル・インクルージョンという概念・言葉が誕生する前から、それに類似した活動として博物館ではしょうがい者に関する取り組みが行われていた。

視覚しょうがい者への芸術鑑賞支援の取り組みとして、1960年代にアメリカの社会・リハビリテーション庁（SRS）は、Dr. Allen H. Eatonによる視覚しょうがい者の芸術鑑賞活動の支援を行った。この企画では、Dr. Eatonの著書“Beauty for the Sighted and the Blind”（St. Martin’s Press, New York, 1959）に書いてあるように目で見てか触っても美しい作品41点を収集し、多くの視覚しょうがい者グループに鑑賞の機会を与えた。数年後にこの企画を一步進めたものとしてNorth Carolina美術館では永久的な展示を企画し、視覚にしょうがいのある理事長のため1966年にMary Duke Biddle Gallery が開館した。このギャラリーにはアメリカ中から278点に及ぶ作品が寄贈され、目の見える人々も毎日一定の時間利用できるようになっていた。第一の部屋にオリエンテーションを聞くための受話器を設置し、それぞれ点字パネルがつけられた作品はコルクでカバーされたカウンター上に並べられ、さらにカウンターの縁に約5 cmのレールを取り付け、このレールで誘導を

---

<sup>2</sup> 島村ウィルコックス有香「博物館におけるソーシャル・インクルージョン（社会的包括）活動とその定義—イギリス博物館界におけるソーシャル・インクルージョンの実践とその背景を中心に—」博物館学雑誌、第28巻、第2号（2003年）、同「ボランティア・プログラムと雇用にみる、イギリス博物館・美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動」『日本ボランティア学会2004/2005年度版学会誌』（2005年）などがあるが、それらの論考はイギリスを事例に論じたものである。先行研究の詳細やソーシャル・インクルージョンの定義については別稿を用意している。とりあえず本稿では「ソーシャル・インクルージョン活動」については「ソーシャル・インクルージョン活動＝バリアフリーやしょうがい者対応」といったような短絡的な考えに結び付き易いが、ソーシャル・インクルージョンの実現のための各施策や対応を包括したものの総称と定義しておく。

行うように設計されていた。このギャラリーが視覚のしょうがいの有無に関わらず多くの人から評判を得たことで、コネチカット州ハートフォードにあるWadsworth AtheneumやニューヨークのBrooklyn Museumなど他の美術館も類似した事業を企画した<sup>3</sup>。現在はMary Duke Biddle Galleryは閉館しているが、コロラドスプリングスにあるFine Arts Center's Tactile Galleryなど視覚しょうがい者のための美術館はアメリカに3館存在している<sup>4</sup>。また、1969年にアメリカ・サンフランシスコに設立されたExploratoriumは、「発見するのはあなた自身！」というコンセプトとともに、「歴史資料の収集・展示」「科学教育の展開例としてのハンズ・オン展示」を行い世界の科学技術博物館に大きな影響を与えた<sup>5</sup>。1973年には、同じくアメリカでRehabilitation Act of 1973、建築物と輸送バリア順守委員会を制定し、新築の建物の物理的アクセスを保証する法律が施行された。その後、1980年代の前半にはドイツ・ベルリン、ベルギー・ブリュッセルの博物館で視覚しょうがい者のためのギャラリーがオープンし、1980年代後半には、欧米諸国、特にイギリスで「誰にでも触れる展示（ハンズ・オン）」がなされるようになった。1986年にはフランス・パリ北東部にある複合施設「ラ・ビレット」の科学産業都市において「身障者のためのアクセス憲章」を創り、4名からなる博物館のアクセス部門を設置、その中には視覚しょうがい者1名、聴覚しょうがい者1名の計2名を有していた<sup>6</sup>。イギリスでは、ソーシャル・インクルージョンが1997年より政府の方針の一つに取り上げられたことで、近年イギリスの博物館、美術館では社会的包括に関わる様々な活動が行われている（島村ウィルコックス2003）。また2002年に設立された博物館・図書館・アーカイブス委員会（MLA）は、イギリスの9つの地域圏すべてにエージェンシーを置き、イギリスの文化政策の優先課題である「ソーシャル・インクルージョン」「文化の多様性」「身障者のアクセス向上」を地域エージェンシーが担当している。イギリスでは政府以外の動きも活発であり、2002年にはプロのアーティストとホームレスがワークショップを重ねて創作を行い、ホームレスの人たちが歌や演技や裏方も担う年1度の舞台パフォーマンスを行うソーシャル・アート団体「ストリート・ワイズ・オペラ」が設立された。類似した活動として現在、ヨーロッパの多くの劇場ではホームレスプロジェクトとして、ホームレスに月1回シャワーを浴びてバザーで集めた服を着てもら

<sup>3</sup> (財) 日本障害者リハビリテーション協会「リハビリテーション研究」1972年1月、pp17-21

<sup>4</sup> Mark Arnest "Art with feeling/ FAC's Tactile Gallery takes the center stage". Gazette, The (Colorado Springs). FindArticles.com. Dec21, 2001. ([http://findarticles.com/p/articles/mi\\_qn4191/is\\_20011221/ai\\_n9997650/](http://findarticles.com/p/articles/mi_qn4191/is_20011221/ai_n9997650/))

<sup>5</sup> 高安礼士「日本のミュージアム事情について 科学博物館における学び（Ⅱ）—科学博物館は何を目指すか—」CANVAS（2010年8月）(<http://www.canvas.ws/jp/hiroba/clm103.html>)

<sup>6</sup> 財団法人 日本博物館協会「博物館の望ましい姿シリーズ12 誰にもやさしい博物館づくり事業 欧米における博物館のアクセシビリティに関する報告書」（2007年3月）pp23-24

い、オペラやコンサート、演劇に招待する活動を行っている<sup>7</sup>。

以上、博物館・美術館を巡るソーシャル・インクルージョン活動の全てを網羅したわけではないが、それらの活動から見る限り日本に比べ欧米ではソーシャル・インクルージョン活動が進んでいると言える。アメリカでは50年も前から視覚しょうがい者へ向けた芸術鑑賞の支援を行っており、またイギリスでは政府主導でソーシャル・インクルージョンが文化政策の課題として掲げられ、民間団体でも活発な活動が行われている。これに対し、日本のソーシャル・インクルージョン活動はどのような歩みを続けてきたか、次節で述べていくことにする。

## 2. 日本におけるソーシャル・インクルージョン活動の歴史と実践

### (1) 美術館によるソーシャル・インクルージョン活動

ソーシャル・インクルージョンという概念・言葉が日本に輸入される以前から、日本の美術館やギャラリーにおいてもバリアフリーだけでなく、視覚しょうがいのある人へ向けたハンズ・オン展示（触察展示）などが行われていた。自然史系の博物館の場合は、劣化しにくい実物資料が多いためハンズ・オン展示が比較的導入しやすい現状にあり、実践例も多いがここでは美術館を中心にその活動を見ていきたい。

タッチ・エキシビションが初めて日本に紹介されたのは、1979年フランスのポンピドー国立芸術文化センター〈子供のアトリエ〉による「手で見る展覧会」であり、この展覧会はこれまでの視覚優先の展覧会の形態に疑問符を投げかけ日本の美術界に大きな衝撃を与えた。これに影響を受けて5年後には東京・渋谷にハンズ・オンの彫刻作品を展示する「ギャラリーTOM」が開館されることになった。その後、兵庫県立近代美術館が、同じくギャラリーTOMの仲介により、フィラデルフィア美術館における視覚しょうがい者のための教育プログラム「フォーム・イン・アート」を移行するかたちで1989年に第一回「美術の中のかたち」展が開催された。翌90年より「美術の中のかたち」展は兵庫県立近代美術館の自主企画として1995年を除く毎年開催されており、これは現在日本の公立美術館の試みの中で最も長く続いているものであり、2013年も7月～11月に開催された。また、兵庫県立近代美術館では視覚しょうがい者が鑑賞しやすいように、点字キャプションや感想記入用の点字版を用意し、県下の盲学校等への案内を行った。しかし、ハンズ・オン作品＝視覚しょうがい者のための展示方式という考えが日本の美術館界では先行しているため、静岡県

<sup>7</sup> 平田オリザ「文化の公共性を問う～なぜ今、地域に文化が必要なのか」滋賀県文化振興条例制定記念「文化で滋賀を元気に！キックオフ・フォーラム」基調講演（2009年12月）（<http://www.pref.shiga.jp/c/kemmins/forum/2009jyoureiform/gaiyou-kichoukouen.html>）

立近代美術館は〈ロダン・ウィング〉における触察を、視覚しょうがい者にしか許可しておらず、また兵庫県立近代美術館の常設展示室においても作品に触れることが許されるのも視覚しょうがい者のみとなっている<sup>8</sup>。

他にも、宮城県のせんだいメディアテークでは視覚しょうがいのある人との協働作業による音声ガイドを作成し、森美術館、水戸芸術館、世田谷美術館、名古屋市美術館などでは視覚しょうがいのある人のための美術鑑賞、ことばによる鑑賞（鑑賞ツアー、ワークショップの実施など）を行っている<sup>9</sup>。なかでも、森美術館は2003年の開館時からパブリックプログラムとして、手話ツアーや手とことばによる鑑賞ツアーを行ってきた。また世田谷美術館は、視覚しょうがい者へのサポートとしてボランティアである鑑賞リーダーによる鑑賞ツアーを行っている。他に美術館ではないがボランティア主導の例として、国立博物館では生涯学習ボランティアが手話解説付きのツアーを自主企画し、開催まで1年の準備期間を経て、2009年9月から毎月開催されている。

しょうがい者の芸術活動支援の動きとしては、世田谷美術館が1993年に開催した「パラレル・ヴィジョンー20世紀美術とアウトサイダー・アート」展を契機にしょうがいのある国外作家の作品収集を開始し、展示を行っている。またNPOとの協働の事例として、「NPO ABLE ART JAPAN」が東京都美術館にて過去2回（1997年、1999年）開催した「エイブル・アート」展がきっかけとなり、東京都美術館では、1999年以降企画展ごとの休館日一日を利用して、ボランティア・スタッフによる障害者特別鑑賞会が開かれるようになった。

以上のように、公立美術館のソーシャル・インクルージョン活動の事例も幾つか挙げることはできるが、首都圏や都市を中心としており全国的な展開が行われているわけではない。また、兵庫県立近代美術館では服部正氏、世田谷美術館は高橋直裕氏、森美術館は杉浦幸子氏と、ソーシャル・インクルージョン活動に造詣が深く、しょうがい者の芸術活動や教育普及活動を専門分野とする職員がリーダーシップをとり活動を行っている例が多く一般化しづらい状況にあると言える。

## （2）NPO、市民団体によるソーシャル・インクルージョン活動

美術館でのソーシャル・インクルージョン活動に対し、アートNPOや市民団体によるソーシャル・インクルージョン活動は歴史も長く活動も多岐にわたっている。「アート」と「ケア」の視点から様々なアートプロジェクトを行っている「財団法人たんぼぼの家」は、会理事長の播磨靖夫氏が平成21年（2009）度「芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）」を受賞するなど活動が内外か

<sup>8</sup> 滋岡陽子「タッチ・エキシビションに関する報告」（2003年9月）  
（<http://salsa.sakura.ne.jp/data/html/bunko/theothers/20030926224654.html>）

<sup>9</sup> 財団法人たんぼぼの家「アクセス・アーツ2007 障害のある人の芸術文化ガイド」2007年

ら評価されており、1976年に設立されて以来日本のソーシャル・インクルージョン活動の大きな礎として影響を与えてきた。1995年に提唱した「ABLE ART MOVEMENT (可能性の芸術運動)」を巡る活動やインクルーシブ・デザイン・プロジェクトがあり、しょうがいのある人が演奏を行う「わたぼうし音楽祭」の活動は国際的に広がりつつある。また、「ABLE ART MOVEMENT (可能性の芸術運動)」をたんぼの家と共同で提唱した「NPO ABLE ART JAPAN」も、ギャラリーでのしょうがいのあるアーティストの作品の展示や、企業の寄付金を基に、福祉施設での芸術活動を支援する「エイブル・アート・アワード」という活動などを行っている。他にも、「NPO芸術資源開発機構 (ARDA)」は高齢者ホーム・福祉施設などにアーティストが訪れワークショップをする「アート・デリバリー」を開催、また静岡県浜松市の「NPO法人クリエイティブサポート・レッツ」では健常児、しょうがい児だけでなく在日コリアンなど外国籍の子どもたちのアートを通じた交流としてワークショップを行っており、大阪市・釜ヶ崎の「紙芝居劇むすび」では生活保護受給者が紙芝居を行うなど様々な活動が行われている。

また新しい活動として、廃校を改修して誕生した3331 Arts Chiyodaで行われているプロジェクト「POCORART」は「障害のある人も、そうでない人も、それぞれの方法で直接対話ができる場をつくりたい」という目的から、今までは区別して展示されがちであったしょうがいのあるアーティストとないアーティストの二人展の開催を行っている。他にもしょうがい者スポーツへの理解の促進、また目が見えないというハンディを実際に体験するために、自ら視覚を妨げるお面を制作しブラインド・サッカーを行うワークショップ(次頁、写真参照)などユニークな活動を行っている。

以上から、NPOや市民団体によるソーシャル・インクルージョン活動は、美術館のソーシャル・インクルージョン活動に比べ、対象も内容も多様であることがわかる。



「POCORART」のブラインド・サッカーのワークショップ風景。

視覚を妨げるお面を各自制作している。





自作のお面を付け、ブラインド・サッカーのルールに従い試合を行う。

### (3) 国によるソーシャル・インクルージョン活動の推進

近年の美術館におけるソーシャル・インクルージョンを後押しする動きとして、前述のように文化政策部会による「審議経過報告」（2010年6月7日）が挙げられる。「文化審議会」<sup>10</sup>内に設置されている「文化政策部会」<sup>11</sup>から、2010（平成22年）年6月7日に「審議経過報告」が行われ「文化芸術振興のための文化政策」として美術分野においては美術ワーキンググループから以下の提言がなされた<sup>12</sup>。

#### 「[1] 博物館の管理運営方策の充実

高齢者や身体障害者、さらには外国人等に対応したソフト施策の充実を図ることが重要である。また、学校教育における博物館活用の促進や鑑賞教育の充実を図るため、各博物館において学芸員や教育担当専門職員（エデュケーター）の配置を促進するとともに、国においては研修制度の充実を図ることが求められる。」

以上の提言にあるように、高齢者や身体しょうがい者、外国人に対するソフト施策の促進、エデュケーターなど専門職の配置と研修制度の充実が、管理運営施策の中で挙げられ、前者はまさに

<sup>10</sup> 中央省庁等の改革の中で、国語審議会、著作権審議会、文化財保護審議会、文化功労者選考審査会の機能を整理・統合して、平成13年1月6日付けで文部科学省に設置している。

<sup>11</sup> 文化審議会令第6条第1項（平成12年6月7日政令第281号）及び文化審議会運営規則（平成22年2月10日文化審議会決定）第4条第1項の規定に基づき、文化審議会に、文化の振興に関する基本的な政策の形成に係る重要事項に関し調査審議を行うため設置された。

<sup>12</sup> 文化庁「文化政策部会について」（<http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/seisaku/index.html> 2013年12月8日閲覧）



ソーシャル・インクルージョン活動に直結した内容である。公の場でソーシャル・インクルージョン活動の重要性が説かれたことにより、全国の博物館、美術館の今後の動きが注目される。

つぎに、より実行力のある文化庁の動きとして「美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業」が挙げられる。「美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業」とは、文化庁が全国の館が時代の要請に応える活動基盤整備に取り組むことを促進するために、全国の博物館・美術館の地域活動基盤整備支援事業と国際交流基盤整備支援事業の取り組みの中から他の館のモデルとなるような優れた取り組みを広く公募し、有識者会議によって選定された館を支援する事業である<sup>13</sup>。

平成22年（2010）度の採択事業は39件（26都道府県）であり、その中には独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館での『博物館をみんなのものに～視覚障害児童・生徒へのスクールプログラムーハンズ・オンとワークショップを中心に』や、横浜美術館での『様々な人に開かれた美術館を目指して』、和歌山県立博物館での『仮面の世界へご招待ー博物館資料を利用した視覚障害者用教材開発と教育実践』といった視覚しょうがい者へ焦点を当てた事業だけでなく、地域や子ども・学校をつなぐ「地域連携強化事業」や、韓国や東アジアとの交流促進を目的とした「国際交流拠点形成事業」などソーシャル・インクルージョン活動に通ずる事業も採択されている。この支援事業において文化庁は、事業の実施に要する経費のうち1400万円を限度として支援している<sup>14</sup>。平成21年（2009）度の採択事業である水戸芸術館<sup>15</sup>で行われた「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー『セッション!』」では、開催に先駆けプレ座談会を開き盲学校の教諭などさまざまな立場の実践者・専門者がツアー内容について話し合い、またボランティア研修会も行っている。鑑賞ツアーには計45名（内7名が視覚しょうがい者）が参加した<sup>16</sup>。

以上のように、国（文化庁）によるソーシャル・インクルージョン活動を推進する動きは見られるが、欧米諸国に比べると十分とは言えない。先進国としてアジアの博物館・美術館へのモデル像を提示するためにも、より強いイニシアティブを発揮する必要があると言える。

<sup>13</sup> 文化庁ホームページ「美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業について」

([http://www.bunka.go.jp/bijutsukan\\_hakubutsukan/shien/katsudo/21\\_boshu.html](http://www.bunka.go.jp/bijutsukan_hakubutsukan/shien/katsudo/21_boshu.html))

<sup>14</sup> 同上

<sup>15</sup> 水戸芸術館は日本の公立美術館の中でも、早くから視覚しょうがい者と視覚芸術の歩み寄りを行ってきた美術館であり、初めて視覚にしょうがいがある人にまつわる展示として1990年のソフィ・カルの作品〈盲目の人々〉(1986)の展示以降様々な活動を行っている。

<sup>16</sup> 水戸芸術館現代美術センター「平成21年度文化庁 美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 視覚に障害がある人との鑑賞ツアー『セッション!』」2010年3月

### 3. 美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動の試み

#### (1) 森美術館の「パブリックプログラム」

##### ① 森美術館の概要

森美術館は、東京都港区六本木6-10-1にある「六本木ヒルズ森タワー」53階部分に位置する美術館施設であり2003年10月に開館した。展覧会の内容により異なるが、現代美術を中心に絵画や彫刻、建築、ファッション、そしてインスタレーション等で構成された展示を行っており、展示期間中にパフォーマンスを行う等の新しい芸術表現に関しても積極的に公開を試みている私立美術館である。また、日本の美術館では珍しくエデュケーターを有している。

##### ② 「パブリックプログラム」の概要

森美術館では開館時からパブリックプログラムとして視覚障害者、聴覚障害者向けのアクセスプログラム（「耳と手でみるアート」「手話ツアー」）を行っている。その他にも保育園・幼稚園から大学までの先生と生徒を対象とする学校プログラムを行い教育普及活動に力を入れている。

このパブリックプログラムは当時キュレーターだった杉浦幸子氏（現在はフリーのエデュケーター）が立ちあげたものであり、「教育」という上から下への伝達のイメージよりも、より多くの人に「開かれた」プログラムを企画運営する方向でパブリックプログラムの柱を固め、開館前からさまざまな人たちのニーズに応えるために実施されてきたものである<sup>17</sup>。なお、パブリックプログラムの内容は以下の通りである<sup>18</sup>。

##### ● 一般プログラム

- ・トーク・セッション（日英・手話同時通訳）
- ・アーティストトーク（日英同時通訳）
- ・キュレータートーク
- ・ギャラリートーク

##### ● ファミリープログラム

- ・ベビーカーツアー

<sup>17</sup> エイブル・アート・ジャパン「視覚に障害のある人との言葉による美術鑑賞ハンドブック『百聞は一見をしのぐ!?!』」(<http://www.ableart.org/handbook/4-1.html>)

<sup>18</sup> 森美術館パブリックプログラム ([http://www.mori.art.museum/contents/phantom\\_limb/public/index.html#08](http://www.mori.art.museum/contents/phantom_limb/public/index.html#08))

小さなお子さまを連れた保護者の方を対象としたツアー。

- ・おやこでおしゃべりツアー

おしゃべりを始めたお子さまと、作品を見てお話ししながら展示室を回るツアー。

お子さまの視点に立って、おやこで一緒にお楽しみいただけます。

- ・こどもツアー

展覧会のことをもっと知りたい、楽しみたいという小学生のためのツアー。

- ・シニア向けツアー

シニアの方(60歳以上)を対象としたツアーです。2～3人に1人のスタッフが付き、参加者のペースに合わせて展覧会をご案内します。

- アクセスポログラム

- ・手話ツアー

手話と言葉で展覧会を楽しむツアー。手話をお使いにならない方も参加できます。

- ・耳と手でみるアート

視覚に障害がある方を対象とした、スタッフとの対話を通して作品を楽しむツアー。

- 学校プログラム

- ・先生のためのツアー

美術館のご案内とともに、展覧会を授業で活用する方法について考えます。

- ・とびだす学校ツアー

学校の授業の一環として展覧会をご覧いただくツアー。

- コミュニティプログラム

地域の幼稚園や六本木ヒルズと連携したプログラムなど。

以上のプログラムを森美術館では企画展開催ごとに開催している。

### ③教育普及担当者へのヒアリング

【日時】2009年12月18日

【対象者】森美術館 パブリックプログラム担当者2名

【ヒアリング内容】

このヒアリングでは東京都庭園美術館で「手話ガイドツアー」を行うにあたって、「手話ツアー」を中心に質問を行った。

【ヒアリングへの回答】

「手話ツアー」を行う背景として、「このプログラムを始める前から、港区の手話サークル『て』と直接交流し、アートを楽しむにはどういう形がいいか意見交換を行い、手話勉強会を行ってきた。『て』の会長が社会福祉協議会の婦人部会の方だったので、そこから紹介して頂いた。また、港区の教育委員会へお願いし、ろう学校の授業を見学するなどの活動を通してしょうがい者団体とつながり、『手話ツアー』を周知していった。その結果として、NHKの『手話ニュース』にも取り上げられたりしている。」と述べている。手話サークルやしょうがい者団体とつながりを持つことでプログラムの内容をよりニーズに沿ったものにし、また同時にプログラムの周知を図っていったことがわかる。

「手話ツアー」の形式・内容については、「通常のギャラリートークに手話通訳を付けるような形式。だが、聴覚しょうがいの方は作品を見ながらガイド（手話）を見るができないので、レクチャーする際には間合いの取り方が重要。意見の共有のために、誰かが意見を出したら手話に意見を訳す必要もあり、健常者に対するレクチャーと同じ様にはいかない。」と述べていた。実際に、森美術館の「手話ツアー」に参加すると、参加者の様子を見ながら手話通訳者とのアイコンタクトで解説のタイミングを図っていた。

一回につき何人ぐらいのしょうがい者が参加しているのかという質問に対しては「健常者の方と一緒に参加される方や、手話を勉強中という方も参加されるのでしょうがいがある方は約半数。」と述べている。（ちなみに森美術館では予約時に健常者の制限を設けていない。）

手話通訳者は、「港区社会福祉協議会から1人派遣。事前に一回来て頂いて内容の説明・打ち合わせを行う。固有名詞が通訳するのも難しい。場合によっては紙に書いて用意もする。アートに関して理解のある方（説明を受けた方）が良いので、毎回同じ方か一度でも派遣された方を優先的に希望している。」と述べ、謝礼については「以前、他館にいた時もプログラムを行ったのだが、自治体によって相場は異なる。また、年間に何回行うのか、打ち合わせを何回行うのかによって金額は変わるので聞き方次第（交渉次第）ではないだろうか。」と回答した。

「耳と手でみるアート」では駅までスタッフが迎えに行っているが、「手話ツアー」ではアクセスに関する補助はあるのかという質問に対しては、「特にしていない。チケットカウンターに現地集合。聴覚しょうがい者でも手話をやっている方は比較的積極的な方で、色んな状況や経験を楽しみたいという方が多い。なので、必要以上の補助は行っていない。ただ申し出があれば行う。以前に、弱視の聴覚しょうがい者の方が参加した時には大きな字で筆談を行う対応をした。事前（申込

時)にどのような状況かお伝え頂いたらそれに合わせて対応をしている。」と述べている。

開催日時の設定に関しては、「仕事帰りに参加できるように平日の夜に設定している。土日・お昼に実施して欲しいという意見もあるが、他のプログラムとの兼ね合いもあり平日に行っている。アンケート調査の意見を取り入れ、今後はもっと色んな日時に開催したいと考えてはいるが今は心苦しい状態。」と回答している。

#### 【ヒアリング結果からの考察】

以上のヒアリングより、活動を継続的に行う要因として、手話サークルとの意見交換やろう学校の授業見学など、しょうがい者団体や関連団体とのつながり、また手話通訳者との関係性の構築、アンケート調査でのフィードバック、しょうがいのある人の意思を尊重し必要以上の補助は行わないなどの姿勢が挙げられる。なお、このヒアリングを参考に実践事例として以下の東京都庭園美術館「手話ガイドツアー」の企画開催を行った<sup>19</sup>。

## (2) 東京都庭園美術館の「手話ガイドツアー」

### ① 東京都庭園美術館の概要

東京都庭園美術館（東京都港区白金台5丁目21番9号）は朝香宮邸として1933年（昭和8年）に建てられた建物を、そのまま美術館として公開したもので、建設から半世紀後の1983年（昭和58年）10月1日、美術館として開館した。建物は1920年代から1930年代にかけてヨーロッパの装飾美術を席卷したアール・デコ様式を現在に伝えるもので、フランス人デザイナーのアンリ・ラパンが内装部分を設計し、内部装飾もフランスをはじめとする外国から輸入されたものが多用されている。東京都庭園美術館は従来の美術館とは異なり、建物自体が美術品といえ、東京都指定有形文化財（建造物）にも指定されている。そのため、建物の制約から、ハード面でのバリアフリー化が難しく、長期にわたる改修工事（2011年11月～）前はエレベーターの設置がなされておらず、車いす利用者は2階の展示室へ入室することができなかった。また、2010年当時は教育普及の専任職員はおらずソーシャル・インクルージョン活動が充分行われている状況ではなかった。

### ② 「手話ガイドツアー」の概要

一般的に聴覚しょうがい者に対しては“耳が聞こえなくても、眼で見るのに不自由はないし、行動にも困らないのだろう”というイメージから、キャプションによる解説等の対応で充分であると

<sup>19</sup> 筆者の中村めぐみは東京都庭園美術館インターン生として2009年6月～2010年3月まで学芸業務の補助を行っていたので、この「手話ガイドツアー」を担当して行った。よって、本文におけるバリアフリー化が困難であるといった課題は、改修工事を行う以前の2010年当時の課題である。

いう認識がある。しかし聴覚しょうがい者の中には、手話がネイティブの言語であり文字情報では理解できない方もいる。また、鑑賞時には音声ガイドを使用できないため作品理解のための補足情報へのアクセスが困難である。

また東京都庭園美術館は、東京都指定有形文化財ということもありハード面でのバリアフリーを徹底するのは難しい。その代わりに、ガイドツアー等のソフト面でのバリアフリー対応を行うことは公共の場である“美術館”として、今後推進すべき活動と言える。そしてこの手話ガイドツアーを視覚しょうがい者や高齢者向けへのツアー等、ソーシャル・インクルージョン活動が広がるきっかけとなるために以下の内容で手話ガイドツアーを開催した。

- (a) 展覧会名：平成21年度建物公開「アール・デコの館—庭園美術館建物公開—」展
- (b) 日時：2010年3月27日（土） 16：30～17：30（約一時間）
- (c) 参加費：無料※入館料は身体にしょうがいのある方と御同伴者一名様まで無料。  
(しょうがい者手帳をご提示の方のみ)
- (d) 対象：聴覚にしょうがいのある方（原則、健常者は定員に含めない）
- (e) 募集定員：10名（先着順・要予約）
- (f) 申込方法：FAX・往復はがき・Eメール

開催にあたっては、2009年12月から開催準備を行った。開催までの時間がなかったため、しょうがい者団体とは接触できず、代わり森美術館、東京国立博物館の手話ツアーに参加しヒアリングを行った。また、ヒアリング内容をまとめたものを回覧資料として館内職員との情報の共有化を図った。広報活動として、手話ツアーを行っている美術館や、聴覚しょうがい者団体へのチラシ（添付資料1）頒布や、聴覚しょうがい者向けメーリングリストでの告知を依頼した。なお、テレビ局からの連絡もあったが、定員制であったためテレビでの広報は行わなかった。手話通訳者に関しては、港区社会福祉協議会在宅サービス課から2名派遣してもらい、事前に美術館の概要や展覧会の説明の書類を郵送し、当日にはリハーサルとして事前に学芸員とともにツアーを行い展示内容への理解を図った。また、難しい固有名詞などは「単語カード」を作成し対応した。広報開始から1週間で定員に達し、当日は聴覚にしょうがいのある人が12名参加（全体では13名<sup>20</sup>）した。ツアー終了後は手話ガイドツアーのフィードバックとしてアンケートを行った。以下の写真とコメントは、手話ガイドツアーの様子である。

---

<sup>20</sup> 聴覚にしょうがいのある人が12名、健常者が1名。



「手話ガイドツアー」の様子。

学芸員が説明した後に手話通訳者が通訳を行った。

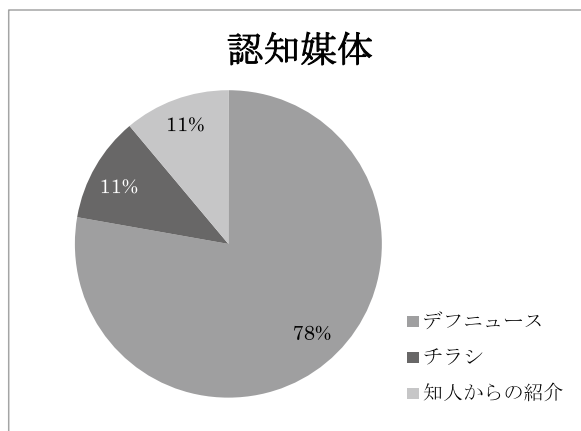
### ③アンケート結果

アンケートは13名の参加者の内、9名（69％）から回答を得た。アンケート項目は13項目であり、質問内容はアンケート用紙（添付資料2）を参照。なお、アンケートには1名健常者が回答している。

#### (a)属性について

回答者の属性として、性別は男性7名（78％）、女性2名（22％）、年代は30代2名（22％）、40代5名（56％）、50代2名（22％）であった。

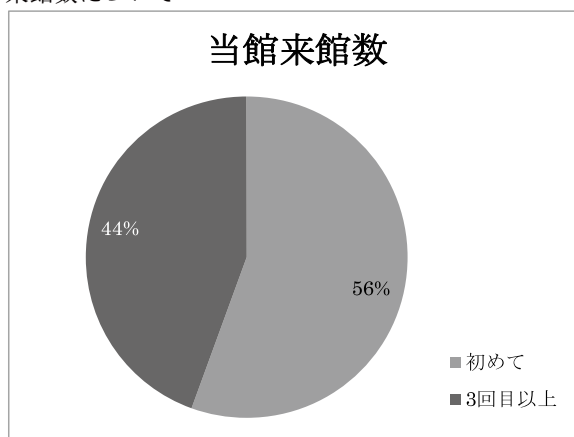
#### (b)認知媒体について





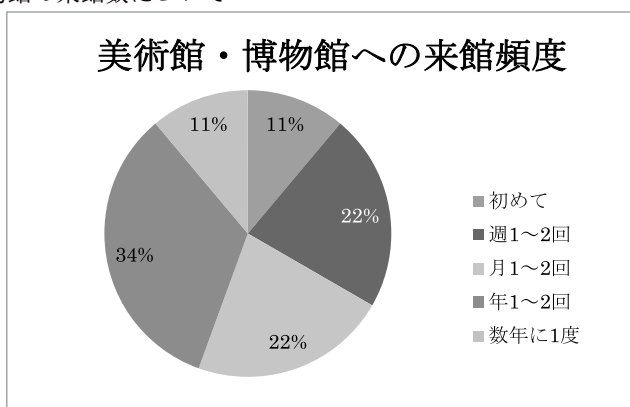
認知媒体は、「デフニュース」という聴覚しょうがい者対象のメーリングリストで情報を得た方が7名（78%）と一番多く、続いて館内で配布したチラシ1名（11%）、知人からの紹介1名（11%）であった。美術館や関連施設等で配布したチラシのような紙媒体よりも、インターネットを利用し情報を得る方が多いということがわかった。

(c)東京都庭園美術館の来館数について



東京都庭園美術館への来館数は、初めての方が5名（56%）、3回目以上の方が4名（44%）という結果だった。手話ガイドツアーを行ったことで、リピーターだけではなく新規に来館者を誘引できるということがわかった。

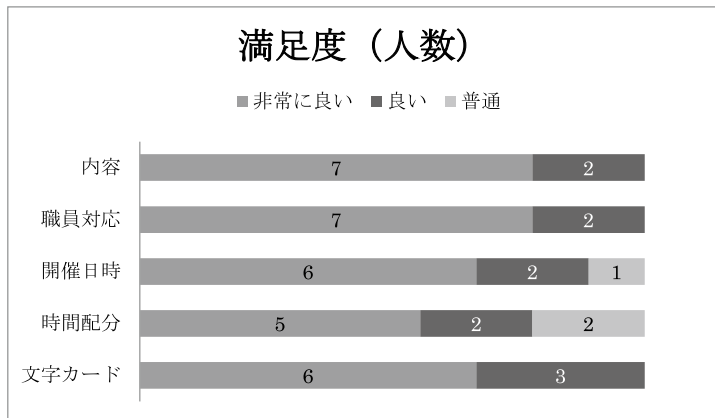
(d)他の美術館・博物館の来館数について



他の美術館・博物館の来館頻度は、初めての方が1名（11%）、週1~2回の方が2名（22%）、月1~2回の方が2名（22%）、年1~2回の方が3名（34%）、数年に1度という方は1名

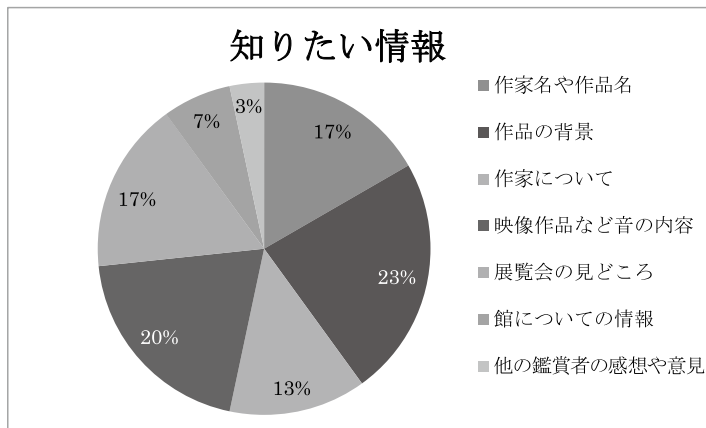
(11%)であった。来館頻度が週1～2回、月1～2回の博物館・美術館のヘビーユーザーが約半数いる一方、初めて、年1～2回、数年に一度という博物館・美術館に普段なじみのない方も約半数であった。

(e)手話ガイドツアーの満足度について



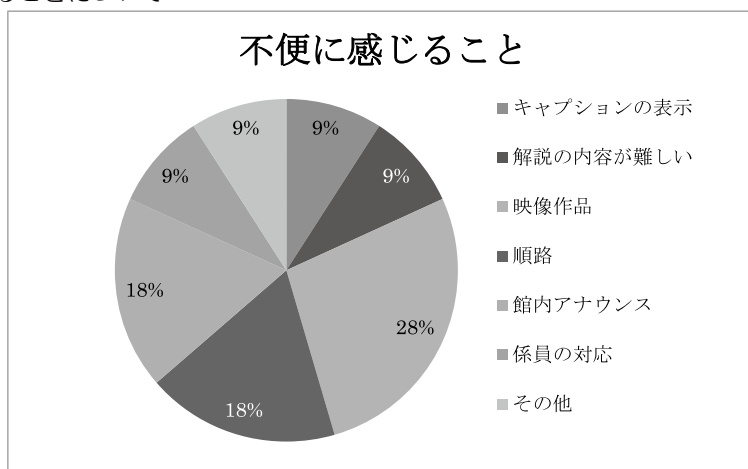
満足度を尋ねたところ、内容については「非常に良い」が7名(78%)、「良い」が2名(22%)、職員対応については「非常に良い」が7名(77%)、「良い」が2名(22%)、開催日時については「非常に良い」が6名(67%)、「良い」が2名(22%)、「普通」が1名(11%)、時間配分については「非常に良い」が5名(56%)、「良い」が2名(22%)、「普通」が2名(22%)であり「2時間でも良かったのでは」といった意見があった。文字カードについては、「非常に良い」が6名(67%)、「良い」が3名(33%)であった。総合的に満足度は高かったと言える。しかし、開催日時や時間配分に関しては今後も検討が必要であると思われる。

(f)知りたい情報について



美術鑑賞の際、どのような情報が知りたいかという質問に対しては、複数回答で「a.作家名や作品名」5名（17%）、「b.作品の背景」7名（23%）、「c.作家について」4名（13%）、「d.映像作品など音の内容」6名（20%）、「e.展覧会の見どころ」5名（17%）、「f.館についての情報」2名（7%）、「g.他の鑑賞者の感想や意見」1名（3%）であった。「作品の背景」について知りたいという回答が一番多く、続いて「映像作品などの音の内容」という回答が多かった。映像作品を展示する際は、セリフに字幕を入れるなど音情報を視覚化する配慮が求められていることがわかる。

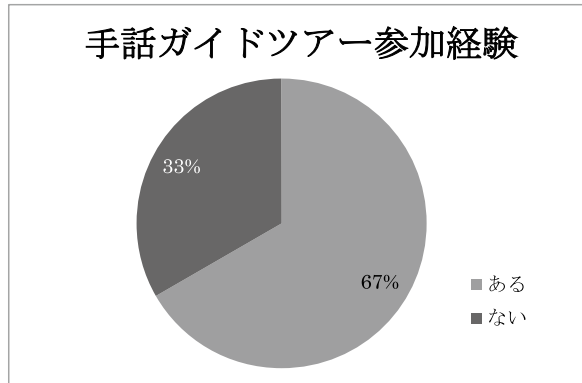
(g)不便に感じることについて



美術鑑賞の際、不便に感じることは、複数回答で、「a.キャプションの表示（ルビの有無、文字の大きさ）」1名（9%）、「b.解説の内容が難しい」1名（9%）、「c.映像作品」3名（28%）、「d.順路」2名（18%）、「e.館内アナウンス」2名（18%）、「f.係員の対応」1名（9%）、「g.その他」1名（9%）で記述内容として「音声ガイド」という回答が挙げられた。

前設問の知りたい情報の回答に類似しているが、「映像作品」の鑑賞については不便に感じるという意見が多かった。つづいて「順路」や「館内アナウンス」が回答として多く挙げられた。また、不便に感じることの回答人数は知りたい情報の回答人数よりも少なく、鑑賞での不便さよりも鑑賞者が知りたいことに対応できていないということが聴覚しようがい者にとっては問題だということがわかった。

(h)他館での手話ガイドツアー参加経験について

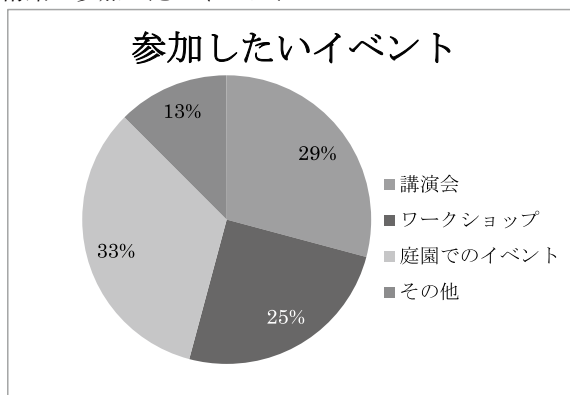


他館での「手話ガイドツアー」に参加した経験は、あると回答した方が6名（67%）、ないと回答した方が3名（33%）で、殆どの回答者に参加経験があることがわかった。参加した博物館・美術館については森美術館4名、東京国立博物館2名、「色々（な場所）」と回答した方が1名であった。

参加した経験のある方に参加の感想を自由記述でたずねたところ、「残念なことに手話通訳のレベルがガイドの内容についていけず、質問しようがなかった。そういう意味でも手話通訳のレベルは重要です。」「専門の手話通訳であれば問題ないが、手話ができる（手話サークルの人とか）というレベルの人だと内容がつかみにくいです。」「建物の単なる解説だけでなく、その建物が建った背景やその時代の状況の説明もあったので、ますます深く建物を味わえた。」「手話通訳者自体が美術館という空間で手話をするシチュエーションに慣れておらず、戸惑いが感じられた。但し、東京国立博物館はボランティアの中で手話ができる人が通訳を担当していた為非常にこなれていた。」といった感想が挙げられた。

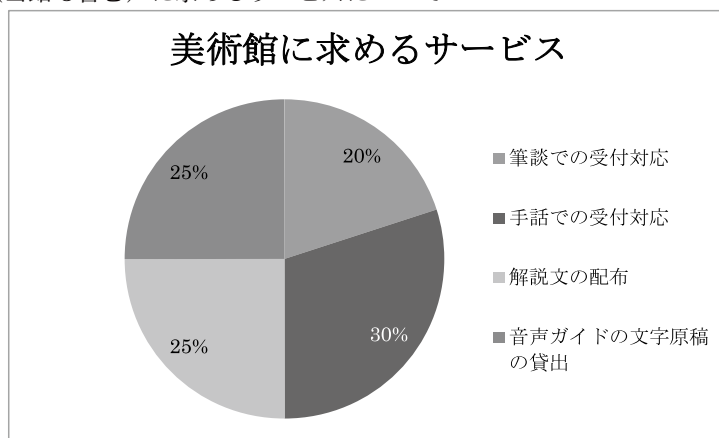
以上の感想から、手話通訳者のレベルが非常に重要であることがわかる。作品を説明するにあたって美術用語や固有名詞を使わなければいけない場合も多く、手話通訳者が作品を理解していなければ、正確な通訳を行うことができない。より高いフェーズの問題ではあるが質の高いガイドを行うためにも手話通訳者のレベルを理解した上で、主催する館が手話通訳者に事前に展覧会や作品などについて情報を提供しておく指必要があると言える。

(i) 今後、東京都庭園美術館で参加したいイベントについて



東京都庭園美術館で今後どのようなイベントに参加したいかという質問（複数回答可）では、「a. 講演会」7名（29%）、「b. ワークショップ」6名（25%）、「c. 庭園でのイベント」8名（33%）、「d. その他」3名（13%）で記述内容として「質疑応答」という回答があった。東京都庭園美術館固有のニーズではあるが、「庭園でのイベント」に参加したいという回答が一番多く、続いて「講演会」「ワークショップ」が挙げられる。ワークショップや庭園でのイベントに参加者の対象を特に設けていない場合でも、しょうがいのある人の参加は見られないことからしょうがいのある人の参加を促すために個別の配慮を行う必要があると言える。

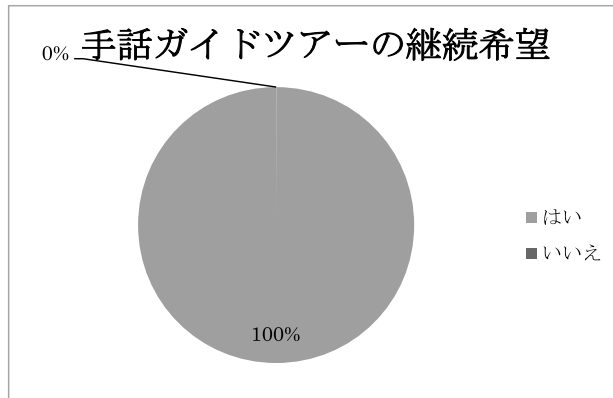
(j) 今後美術館（当館も含む）に求めるサービスについて



今後美術館（当館も含む）に求めるサービスについては、複数回答で「a. 筆談での受付対応」4名（20%）、「b. 手話での受付対応」6名（30%）、「c. 解説文の配布」5名（25%）、「d. 音声ガイドの文字原稿の貸し出し」5名（25%）であった。「手話での受付」を求める回答が一番多く、次に

「解説文の配布」「音声ガイドの文字原稿の貸出」が挙げられた。特に「解説文の配布」はしょうがいの有無に関わらず一般的にニーズが多いが、人数の少ない美術館では学芸員は展覧会準備に追われ解説文を作成する余裕がないのが現状である。また解説文に代わるツールとして音声ガイドが使用されることがあるが、聴覚しょうがい者にとっては利用できないため「音声ガイドの文字原稿の貸出」を行うなどの対応が望まれる。

(k)手話ガイドツアーの継続について



今後、「手話ガイドツアーの継続を望みますか」という質問については、9名全員が「はい」と回答した。今後も手話ガイドツアーの継続を希望する声が多いことから、参加者が美術館のサービスとしてこのようなソフト対応を求めていることがわかる。

(l)手話ガイドツアーの感想、展示内容や美術館に関する意見

最後に本日の感想、展示内容や美術館に関する意見を自由記述で尋ねたところ、「大変素晴らしい内容で、かつガイドツアー時の職員対応に感心しました。またこのような企画があれば是非来たいと思いました。ありがとうございました。」「説明文にはない感覚で説明の内容がわかりました。手話付きの方がわかりやすいです。」「初めて良かった（と感じた）。」「この美術館のオープンの時から何回も来ている庭園美術館ですが、今日の手話ツアーで初めて知って驚いたことや今まで謎に思っていたことが明らかになって本当にスッキリした気持ちである。同時にこの美術館への愛情がますます深まってきています。」「他の来館者の通路確保のため人員を配置するなど館全体をあげてこのツアーを成功させようという意気込みが伝わってきました。庭園美術館は展示空間に特徴があるので手話という空間言語をクリエイティブに生かすガイドができる場所と思います。是非これからろう者のニーズを聞きながら継続して下さい！」という好意的な回答があった。また「学芸員

のご説明なども聞きたい。有名作家、画家のお話も聞きたい。」「事前に申し込んで手話ガイドを付けると便利」「まあまあ良かった。」「映像室のテレビにクローズキャプション（字幕）をつけてほしい。説明板の色を逆にして欲しい（背景が黒、文字が白）」といった要望も寄せられた。

以上の参加者によるアンケートの回答から、手話ガイドツアーは概ね満足度が高く、参加者の展覧会内容の理解につながったといえる。また手話ガイドツアーを行うことで、新規の来館者を誘引できたこともわかる。その点からも、手話ガイドツアーはソーシャル・インクルージョン活動に対し参加者へ学習の場を与えるだけでなく、美術館をより知ってもらおう機会として美術館側にとっても実りある試みだと思われる。

今回、東京都庭園美術館で手話ガイドツアーを開催できた要因として、3点が挙げられる。まず1点目に担当展覧会がないインターンが専任して企画準備を行うことで十分な事前準備ができたことである。2点目に、先行して手話ツアーを行っている美術館へのヒアリングによるノウハウの取得が挙げられる。今回の開催にあたりインターンが森美術館や東京都国立博物館での手話ツアーに参加し、ヒアリングを行ったことで実施に関する情報を得ることができた。3点目に、館内での知識・情報の共有化のためにインターンが回覧資料の作成などを行った。ヒアリング等で収集した知識や情報を回覧資料にすることで館職員への認知、意識の向上を図った。そのため手話ガイドツアー当日は、来館者の誘導や記録係として多くの職員の協力があつた。これらの点が、手話ガイドツアーの成功要因であり、参加者の満足度につながったと推測できる。

### （3）「みんなの美術館プロジェクト」

#### ①「みんなの美術館プロジェクト」の概要

最後に、多くのアートNPO・市民活動の中から、美術館を対象にソーシャル・インクルージョン活動の推進を行っているプロジェクト「みんなの美術館プロジェクト」について事例紹介をする。「みんなの美術館プロジェクト」とは、2009年からスタートした美術館を訪れるさまざまな人の立場から課題や魅力を考える2年間のプロジェクトである。主催者は「美術館×インクルーシブ×デザイン実行委員会」で「NPO ABLE ART JAPAN」、横浜市民ギャラリーあざみ野（横浜市青葉区あざみ野南1-17-3）、平井康之氏（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授）、梅田亜由美氏（女子美術大学美術館学芸員）、半田こづえ氏（筑波大学大学院博士課程）、松浦昇氏（東京藝術大学大学院博士課程）から構成されている。またこのプロジェクトは、横浜市民ギャラリーあざみ野を拠点ミュージアムとして活動し、NPOと美術館の協働のプロジェクトとして「花王・コミュニティミュージアム・プログラム 2010」の助成を受けている。

このプロジェクトは3つの段階から成り立っており、第1段階では、さまざまな人たちの「こ



んな美術館あったらいいな!」というニーズを知るためにインクルーシブデザインの手法を用いて連続ワークショップを行った。この連続ワークショップ「こんな美術館あったらいいな!」では毎回テーマを変えて実施し、しょうがいのある人などのメインユーザーを中心にワークショップの参加者と共に課題を抽出し、ワークショップ終了後には出された「気づき」や課題を整理・集約してデータベース化し、当該プロジェクトのホームページ上で公開している。

第2段階では、第1段階の課題抽出を踏まえて、異なる種別のユーザーの課題を同時に解決する方法やサービスなどについて検討する課題解決のためのワークショップを実施している。現在はこの第2段階であり、2010年11月に第一回目の課題解決ワークショップが行われた。このワークショップで得られた解決策は、実現可能なアイデアから横浜市民ギャラリーあざみ野においてテストケースとして実施することになっている。そのため予算的、人力的に施設側に負担がかかりすぎる非現実的な解決策ではなく、市民ボランティアの力や他の専門団体との連携や工夫による実現可能な解決策を導き出し、他の美術館などでも応用性の高いプランの実現を目標としている。テストケースとして行う際には展示会の来館者の反応をフィードバックし解決策としての精度を上げていくことになっている。

最後に第3段階では、このプロジェクトの成果をホームページなどを通じて公開し、全国的な広がりとして全国の同様な美術館や博物館、市民活動に貢献していくことを目標に掲げている。

## ②連続ワークショップ「こんな美術館あったらいいな!」の内容

以上の第1段階の活動として行われた連続ワークショップ「こんな美術館あったらいいな!」は、以下のメインユーザーと日程で計5回横浜市民ギャラリーあざみ野にて開催された。なお、筆者の中村めぐみは第1回～第4回、馬場憲一は第2回に参加した。

第1回「聴覚に障がいがある人」と美術館

2009年11月1日(日)開催

第2回「歩行が困難な人」と美術館

2009年11月3日(火/祝)開催

第3回「日本語以外を母語とする人」と美術館

2010年2月6日(土)開催

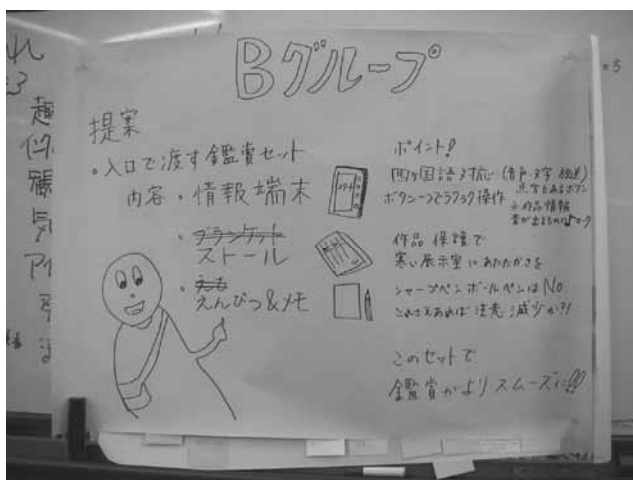
第4回「視覚に障がいがある人」と美術館

2010年2月7日(日)開催

第5回「ミックスユーザー」

2010年3月7日（日）開催

ワークショップでは初めに、ワークショップの趣旨説明、参加者の自己紹介、インクルーシブデザインについて説明が行われた後に、メインユーザーを中心にした10人未満のグループで美術館を巡り「気づき」を出していく。館内の観察を行う際には1階の入り口前から2階の展示スペースまでを対象とし、美術館に訪れる際の一連の動作（入場券を買う等）を意識しながら、空間、人、設備、環境、導線などあらゆることの不便な点や便利な点、また改善点を挙げていく。挙げられた「気づき」は記録担当者がポストイットに記録する。約1時間半、館内の観察を行った後に各グループで「気づき」を共有し、鑑賞に関することや施設に関することなど「気づき」について分類を行う。その後、挙げられた「気づき」の中から中心となる課題を選び「こんな美術館あったらいいな！」というアイデアに展開させていく（以下、写真参照）。



アイデアの一例。

情報端末、ストール、えんぴつ&メモの「鑑賞セット」を提案。

以上のようなアイデアを各グループがまとめ、最後にグループのメンバー全員で発表を行う。

この連続ワークショップを通して約1000件の「気づき」が挙げられ、ホームページでのデータベースでは859件が公開されており、現在は第2段階として抽出された約1000件の「気づき」を基に、課題解決のためのワークショップを行っている（2010年12月現在）<sup>21</sup>。

この「みんなの美術館プロジェクト」は様々なユーザーのニーズを理解する画期的な活動であり、

<sup>21</sup> 「みんなの美術館プロジェクト」ホームページ (<http://www.museumforall.org/>)

NPOと美術館が協働でソーシャル・インクルージョン活動の推進を行っている先進的な活動だと言える。今後この活動が全国的に広まり、全国の美術館のソーシャル・インクルージョンへの意識が向上することが期待される。

## おわりに

以上、美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動の実態と課題をみてきたが、ここではそれら要約し、今後、美術館がソーシャル・インクルージョン活動を行うにあたって取り組むべき課題とその解決のための施策などを提示しまとめとする。

日本におけるソーシャル・インクルージョン活動は一部の美術館、NPOなどの市民団体によって問題意識をもって取り組まれていたが、欧米に比べて国（文化庁）によるソーシャル・インクルージョン活動の推進事業は充分ではなく、さらに公立美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動は都市や首都圏を中心に行われているだけで全国的な展開が行われていない状況が明らかになった。

一方、それらの分析を通して美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動への課題が明らかになった。まず紹介した事例からソーシャル・インクルージョン活動を行っていくために必要な条件として関連団体との協力・関係づくりが挙げられるが、森美術館の場合は、アクセスプログラムを開催するために、手話サークルやしょうがい者団体の協力を仰ぎニーズの理解や周知活動を行い、手話通訳者との関係づくりにも力を入れガイドを行う際には事前の打ち合わせを行っていた。それは東京都庭園美術館の手話ガイドツアーのアンケートからも、参加したしょうがい者の内容理解に手話通訳者のレベルが影響を与えていることがわかり協力者との関係づくりの重要性がうかがわれた。さらに美術館においてソーシャル・インクルージョン活動を行うためには視覚しょうがい者、外国人、高齢者の対応についてもどういった対応が適切か、正確なニーズを知ることが求められていることがわかった。そのため各関連団体と接触しユーザーの意見などの情報や対応に関するノウハウを取り入れる必要があることが明らかになった。

つぎに美術館におけるソーシャル・インクルージョン活動にあたって、先進的な活動を行っている公立美術館では、ソーシャル・インクルージョン活動への意識が高い中心的な人物が存在する場合も多く、情報・ノウハウの共有化を図ることで職員のソーシャル・インクルージョン活動への意識を向上させることも、この活動を推進していく上で重要なことと考えられた。また、「みんなの美術館プロジェクト」のユーザーの「気づき」をまとめたデータベースの公開により、全国的な情報やノウハウの共有化が期待されることもわかった。

さらにソーシャル・インクルージョン活動を行うにあたっては、人材の育成・確保もまた重要であり、世田谷美術館、東京国立博物館のようにボランティアが中心となってソーシャル・インクルージョン活動を行う例もみられることから、ソーシャル・インクルージョン活動を行う上でボランティアの組織化は人材不足の美術館にとって有効な解決策の一つであることも明らかになった。

〔付記〕本稿作成にあたっては、森美術館、東京都庭園美術館、美術館×インクルーシブ×デザイン実行委員会の皆様にご高配を頂いた。特に、東京都庭園美術館の「手話ガイドツアー」実施とアンケート調査にあたっては、学芸課長高波真知子氏（現 渋谷区松濤美術館副館長）をはじめ、学芸員の八巻香澄、浜崎加織の両氏にご指導を頂いた。記して謝意を表する次第である。



# 東京都庭園美術館

ART DECO IN THE FORMER PRINCE ASAKA RESIDENCE

アール・デコの館やかた —庭園美術館 建物公開—

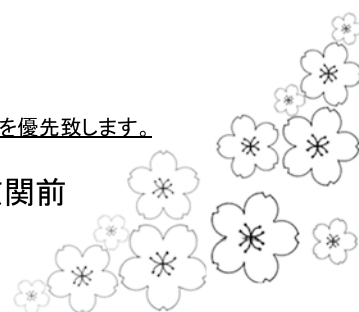
## 手話ガイドツアー

桜が咲く季節、アール・デコ様式の装飾をそのまま残す旧朝香宮邸（東京都指定有形文化財）の建物の歴史と美しさを堪能しませんか？

当美術館では「建物をじっくり見たい」という声にお応えし、年に一度建物公開展を開催していますが、今年はより多くの方楽しんで頂くため手話通訳付きのガイドツアーを行います。

「建物についてもっと知りたい」「美術館をもっと楽しみたい」という方は是非ご参加下さい！

1. 開催日時 2010年3月27日(土) 16:30～17:30(約1時間)
2. 参加費 無料(入館料は別途)
  - \* 障害者手帳をご提示されると、ご本人さまとご同伴者1名様まで入館料は無料です。
  - \* 障害者手帳をお持ちでない方は、入館料が必要になります。
3. 募集定員 10名(要申込)
  - \* ご同伴者は、定員に含まれません。
  - \* 申込多数の場合は、障がいのある方を優先致します。
4. 集合場所 東京都庭園美術館 正面玄関前
5. 申込方法 ※裏面をご覧ください。



### アール・デコの館(やかた) 一庭園美術館建物公開— Art Deco in the Former Prince Asaka Residence

会期： 2010年3月25日(木)—4月11日(日) 会期中無休  
 開館時間： 午前10時—午後6時(入館は午後5時30分まで)  
 金曜日・土曜日は午後8時まで開館(入館は午後7時30分まで)  
 ただし庭園は午後6時で閉園  
 入館料： 一般 800(640)円  
 大学生[専修・各種専門学校含む] 640(510)円  
 小・中・高校生および65歳以上 400(320)円  
 \*( )内は20名様以上の団体料金  
 \*未就学児、障がい者手帳をお持ちの方とその同伴者1名、  
 教育活動として教師の引率する都内の小・中・高校生  
 および教師は無料(事前の申請が必要)  
 主催： 財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館  
 後援： 東京都  
 協賛： 戸田建設株式会社、東京ガス株式会社



東京都庭園美術館  
TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

〒108-0071 東京都港区白金台5-21-9  
 tel.03-3443-0201  
 URL <http://www.teien-art-museum.ne.jp>  
 JR山手線「目黒駅」東口・東急目黒線「目黒駅」中央口より徒歩7分/  
 東京外环线北線・都営三田線「白金台駅」1番出口より徒歩6分

5. 申込方法 下記の申込書をご記入の上、FAX でお送り下さい。  
往復はがき・Eメールでも受付しています。  
(下記と同じ項目を記入しお申し込み下さい。)  
※定員になり次第〆切らせて頂きます。

●お申し込み・お問い合わせは・・・

108-0071 東京都港区白金台5-21-9  
東京都庭園美術館 「アール・デコの館」展手話ガイドツアー係宛  
Eメール: info@teien-art-museum.ne.jp FAX: 03-3443-3228



東京都庭園美術館 FAX:03-3443-3228

## 【手話ガイドツアー参加申込書】

3月27日(土)の「手話ガイドツアー」に参加します。

お名前( )

ご住所( 〒 )

F A X ( )

Eメール( @ )

参加希望者人数( )名、うち同伴者数( )名  
※手帳をお持ちの場合、入館料は同伴者1名のみ、無料。

ご要望・ご質問など

( )

- ・・・健常者で手話の勉強のため参加希望の方はチェックを入れて下さい。  
申込多数の場合は、障がいのある方を優先させて頂くことがありますのでご了承下さい。





7. 美術鑑賞の際、どのような情報が知りたいと思いますか？（複数回答可）  
a. 作家名や作品名 b. 作品の背景 c. 作家について d. 映像作品など音の内容  
e. 展覧会の見どころ f. 館についての情報 g. 他の鑑賞者の感想や意見 e. その他（ ）
8. 美術鑑賞の際、不便に感じることはありますか？（複数回答可）  
a. キャプションの表示（ルビの有無、文字の大きさ） b. 解説の内容が難しい c. 映像作品 d. 順路  
e. 館内アナウンス f. 係員の対応 g. その他（ ）
9. 他館での「手話ガイドツアー」に参加した経験はありますか？  
a. はい（場所 ） b. いいえ  
→「はい」と答えた方へ、どのような感想をお持ちですか？  
（ ）
10. 今後どのようなイベントに参加したいですか？（複数回答可）  
a. 講演会 b. ワークショップ c. 庭園でのイベント d. その他（ ）
11. 今後美術館（当館も含む）に求めるサービスがございますか？（複数回答可）  
a. 筆談での受付対応 b. 手話での受付対応 c. 解説文の配布  
d. 音声ガイドの文字原稿を貸し出し e. その他（ ）
12. 今後、「手話ガイドツアー」の継続を望みますか？  
a. はい b. いいえ c. どちらでもよい
12. そのほか、本日の感想、展示内容や美術館に関するお声をご自由にお聞かせ下さい。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

ご協力ありがとうございました